

当院におけるステントグラフト内挿術の検討

東仁会 吉祥寺あさひ病院

矢野 卓郎 (ヤノ タクロウ)、野口 智永

【緒言】人工血管内シャントの流出路狭窄はアクセス維持の大きな障壁となる。本邦では2020年に人工血管内シャントの静脈側吻合部狭窄治療に対しステントグラフト(以下 SG)の保険適用が開始され、低侵襲かつ有効な流出路形成が可能となった。当院でのSG内挿術について検討・報告を行う。

【方法】当院において2020年7月1日～2024年5月31日に人工血管流出路狭窄に対しSG内挿術を行った症例について後方視的に検討を行った。

【結果】観察期間内に人工血管流出路狭窄に対し59例にSG内挿術を施行した。平均年齢 76.3 ± 8.9 歳、男性31例(52.5%)、原疾患は糖尿病性腎症が23例(40.0%)であり、対象症例の人工血管は83.1%でePTFEが使用されていた。一次開存率はSG内挿術前の開存期間中央値が65日であったのに比し、内挿術後では189日と有意に延長を認め、3か月、6か月、12か月の開存率はそれぞれ94.4%、54.1%、20.2%であった。二次開存率に関しても6か月、24か月で95.8%、77.5%と良好な成績であった。

【結語】人工血管の頻回の流出路狭窄で難渋する症例に対しSG留置が開存期間の延長に有用であった。